

相模人形芝居

下中座だより

令和五年 七夕号
第三巻

人形の横顔

「玉藻前曦袂」こぼれ話と
あらすじ

公演リポートと曾我物語

日本民家園「旧工藤家」住宅の歴史
座員のご紹介と数珠つなぎ

下中座のご紹介

催し物のお知らせと日本民家園公演のご案内
小竹の歳時記

座員募集のお知らせ

編集後記

表紙写真

神奈川県川崎市多摩区の生田緑地にある川崎市立日本民家園。県内に留まらず日本各地に伝わる古民家などの保存と伝承を目的に整備されてきた。貴重な文化財として、幾つもの家屋が重要文化財に指定されている。

たまものまえあさいのたもと

玉藻前曦袂

みらばるやかた

道春館の段より

わしづかきんとうじ

鷲塚金藤次の巻

金藤次のカシラ

カシラ分類：鬼(きいち)

塗り：白

機構：アオチ眉、寄り目、横目左右

うなぎぎ：小猿式

髪型：白しやぐま前棒茶筌

衣装：皮色錦半腰

紫紺精好半素袍

龍神巻



文・林美穂子 座長

人形の横顔

あらすじ

【こまめ】

鳥羽天皇の兄、薄雲(うすくも)王子は日食の生まれのため、帝位を弟宮に譲った不満から反逆を企んで、右大臣道春の家に伝わる神器である名剣・獅子王を盗ませた。

また、道春の姉娘、桂姫に思いをかけ、清水寺参詣中の桂姫を襲わせるが、居合わせた姫の恋人、安倍采女(うねめ)之助に追い散らされる。

【道春館の段】

道春はすでに世を去り、後室、秋の方は采女之助に剣の探索を頼んでいた。折から、薄雲王子の使者、鷲塚金藤次が来て、「剣か桂姫の首を渡せ」と迫る。

秋の方は、桂姫が拾い子であると打ち明け、美子の初花姫とすぐろくの勝負で負けたほうの首を打つように頼む。姉妹は互いに負けようと争い、ついに初花姫が負ける。

しかし、金藤次は桂姫の首を打つ。怒った秋の方と采女之助に刺された金藤次は、桂姫こそ自分が捨てた子で、薄雲王子の命により獅子王の剣を盗んだのも自分だと打ち明け、息絶えた。

そこへ勅使が立ち、初花姫の詠歌が帝の御意にかない、玉藻前と改めて入内(じゆだい)することとなった。

玉藻前曦袂 ことば

大妖怪？美女？玉藻前とは

現在下中座では、「玉藻前曦袂(たまものまえあさひのたもと)」という演目の稽古を行っておりますが、これから皆様にお見せできる「道春館の段」では、演題にもなっている「玉藻前(たまものまえ)」は残念ながら登場いたしません。

そのため、この玉藻前について少し触れておこうと思います。

特に、「玉藻前曦袂」に登場する玉藻前は、今日多くの物語で語られている玉藻前とは若干位置付けが異なりますので、予めご承知いただいた上でストーリーを楽しんでいただければ幸いです。

まず、一般によく見かける「玉藻前」像を挙げますと、大変強い力を持った九尾の狐妖怪、美女に化ける、時の権力者に

取り入って世を乱す、といった点が挙げられます。そのため、古代中国における殷王朝を滅ぼした妲己(だつき)や、周王朝を滅ぼした褒姒(ほうじ)といった傾国の美女たちが、玉藻前の前身であったとする設定もよく見かけます。

さて、では「玉藻前曦袂」における玉藻前ですが、妖怪ではなく、人間の娘で、「道春館の段」に登場する初花姫が宮中に上がって名乗りを変えた姿となります。そして、宮中に上がった彼女を利用して、九尾の狐が現れて彼女を殺し、九尾の狐は「玉藻前」の姿に化けます。つまり、玉藻前曦袂」においての「玉藻前」は、九尾の狐そのものではなく、九尾の狐に姿を奪われたかわいそうな娘の名前となります。



歌川国芳「斑足王と九尾の狐」

文・市川博之

公演リポート 第3巻



第六十四回 曾我の傘焼きまつり

曾我物語 十郎五郎出立の段

昨年の初お披露目から1年が経過し、傘焼きまつりでは2回目の公演となる「曾我物語」。

昨年は天候が不安定でしたが、今年は暑いぐらいのいい天気にも恵まれました。そして会場となった「ふれあいの郷」は昔の稽古場(旧橋支所)と、どことなく似ている雰囲気があったので、勝手に懐かしく感じていました。また、昨年とは会場が違ったため集客が少し懸念されていましたが、当日は決してそんなことはなくほぼ満席で、たくさんのお客さんに観に来ていただきました。(ありがたいありがたい)

個人的なことを言えば昨までは箱王丸(五郎)を担当していました。今年は刺客たちの一人を担当しました。箱王丸と違い、ひとり遣いの人形なので、ある程度自由に演技ができる



◀ 恒例の人形とのふれあいタイム



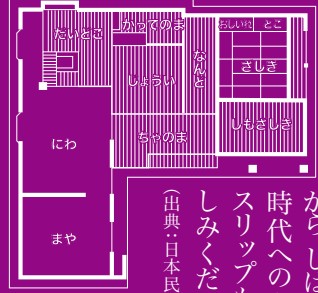
文・倉橋知温

人形です。飛んだり、跳ねたり、追いかけられたり…絶えず子天狗たちにいじめられているので運動量だけで言えば、どの人形よりも多いと思います。実際、当日の本番時では気温が高いいのでとても大変でした。後半は気合で乗り切りました!! 上演後は恒例の人形とのふれあいタイム。たくさんお客さんに人形に触っていただいたり、写真を撮っていただきました。中には「五郎となんとなく似ているよね」と声を掛けてくれる人もいました。(でも今年はずいぶん違いましたよ)

下中座の恒例行事となりつつある傘焼きまつりでの「曾我物語」の上演。来年に向けて更なるパワーアップです!!

下中座が舞台を借りる 日本民家園「旧工藤家」住宅

民家園での公演は工藤家という重要有形文化財の建物で行われます。工藤家は「南部の曲家(まがりや)」という盛岡を中心とする南部藩領という比較的限られた地域で作られていた建築様式で、L字型の家で土間の先にはウマヤがあります。北国の民家では農耕に牛より馬を使っています。瘤の強い馬は飼育が難しいため、ウマヤを屋内に置き馬の健康状態を常に把握できるようにしています。江戸時代中期、18世紀前半頃に誕生したと言われています。(下中座の黎明期と重なります。)



文・長嶋 緑

曲家の中央部の土間には、大きな竈がありそこで火を燃やすとウマヤも暖まるようになっていたほか、土間の奥の板の間にはいろりが切っており、家長の場所からは馬の姿が真正面に見えるようになっていています。馬とともに厳しい南部地方の冬を乗り越えるための工夫といえるでしょう。民家園のこの南部曲家で人形芝居を見ながら、しばし江戸時代へのタイムスリップもお楽しみください。(出典:日本民家園)



座員 数珠つなぎ 座員紹介



市川博之さんが紹介する人は



下中座のパパ 守實利之さん

◀ 座員同士の結婚祝賀の席でスピーチするパパ。まさにパパとしての本領発揮!



◀ 「弁慶上使の段」の稽古で、三人遣いの人形に命を吹き込むパパ。

守實さんは、大阪府にて生まれ育ち、大学入學を機に神奈川県へ移住。現在、公務員としての働きながら、人形遣いとしての活動を行う座員です。人形との出会いのきっかけは、浄瑠璃作家の近松門左衛門を描いたテレビドラマだったとのこと。ドラマを通じて次第に文楽や人形芝居の世界に心惹かれるようになったのだと。

あるとき、神奈川県にも人形芝居座があることを知った守實さんは、下中座の後継者育成講座に参加、人形遣いとしての活動を始めました。人形を遣うことに関しては、「自分と全く異なる存在を演じることに面白さを感じている」と話しています。また、自身の身体でなく人形で芝居をすることや、三人の人形遣いが一体の人形を操ることにについては、「難しさはあるが、その分工夫のしがいがある。三人の人形遣いの息がぴたりと揃って、なめらかな人間な動きが再現できた時の快感は何物にも代えがたい」と話しています。

今後については「幅広くいろんな役を経験したい」としながらも、立役(男性の花形の役)については特に強く関心を持っているようです。そして、「地元の人、神奈川県の人に、明治の近代化や戦争のような苦しい時代を経ても、消えることが無かった素晴らしい芸能が、ここにあることをぜひ知ってほしい」との思いを語ってくれました。

相模人形芝居下中座について

小田原市小竹地区に江戸時代から小竹の芝居として親しまれてきた、三人遣いの人形芝居の一座です。国の重要無形民俗文化財に指定されています。

現在の座員は各地から集まり、年齢層は十代から九十代と幅広く、男女もほぼ半々。学校や職種もさまざまな集団で、練習はまじめに集中する一方、ミーティングは和気あいあいとしていて、めりはりのある魅力的な集まりです。

稽古は、原則として月二回土曜日、夏は涼しいこゆるぎセンターで、それ以外は小竹公民館で行っています。

自慢は美しい人形たち。古典の継承を大切にし、加えて新作の上演も積極的に行っています。また、後継者育成にも力を入れています。

入れ、地元の小、中、高校のクラブで指導し、そこから座員になっている人も少なくありません。小学校などへの体験学習にも出かけています。

一つの芝居をみんなで作り上げる楽しさを味わいながら、皆さんにより素敵な芝居をお届けできるように、これからも励んでいきます。



文・早野里美

小竹の歳時記

初夏

田植えの頃



文・岸敏江

田植えの準備が始まる頃になると、「篠葉」から「丹蔵ヶ谷津」に流れ込む沢にゲンジボタルが飛び交います。

かつての小竹は、「坂呂」「打越」「脇」「下」の四つの地区からなる農村で、田畑の場所を小字で呼び交わしていました。(現在も)その丹蔵ヶ谷津(タンザゲートと言っています)から二宮に抜ける隧道の周辺に、昭和40年代、橋団地が開発造成され、続いて「さつきが丘」「湘南橋台」「若葉台」と、住宅地が広がっていきました。

山あいの小竹には、「谷津」のつく小字がいくつかあり、その沢水を引いて米作りをしていました。田植えの頃は、水辺の生き物や草花が数多く見られます。今は、水田は減りましたが、ホタルが飛び出すと、近くの住宅地の人々が懐中電灯を手に、蛍狩りに訪れます。

座員募集のお知らせ

個性豊かで気持ちの良い仲間と共に1つの舞台を作り上げていく楽しさを、あなたも味わってみませんか?何の制限もありません。思い立ったら是非下記までご連絡を!お待ちしております。

また、公演やワークショップなどのご依頼も承っています。

連絡先メールアドレス:

newsletter@shimonaka-za.jp



日本民家園公演のお知らせ



日時: 令和5年9月24日(日)

△第一部▽

12時30分〜14時

△第二部▽

14時30分〜16時

会場: 川崎市立日本民家園

旧工藤家住宅

演目: 玉藻前囃袂

道春館の段

◎太夫 入江敦子

◎三味線 竹本土佐子

人形解説付き

※体験コーナーあり

入場料: 一般: 1,000円

中学生以下: 500円

※当日11時より民家園正門前でチケットを販売

(民家園の入館料免除)

(当日先着順各回60人)

お問い合わせ:

TEL 044-922-2181

(川崎市立日本民家園)

https://www.nihonminkaen.jp

TEL 0465-44-4573

(下中座)

編集・後・記

曾我別所寿獅子舞保存会の方が「昔はよく一緒に公演をしたらんだね」と声をかけていただきました。下中座の『曾我物語』十郎五郎出立の段を曾我の地に根付かせたいとの思いを強くしました。来年の傘焼きまつりでまたお目にかかりましょう!(H)

玉藻前囃袂の稽古が始まりました。下中座がこの演目に取り組むのは十数年ぶりでしょうか、どう仕上がるのか楽しみです。(I)

公演後の人形とのふれあいコーナーで見に来てくれたお客さんから、「1年ぶりだね」とか「いっぱい写真撮らせてくれるからお兄さんのこと覚えてましたよ」と声を掛けてくれました。着々と僕の顔が広まってくるみたいです。(K)

小竹の歳時記が好きです。今まで全く馴染みなかったこの土地の自然と人々の営みが、目の前に広がっていくようです。小竹の四季も「小竹の人形」もずっと在り続けますように!(秀)

編集会議では、玉藻の前や九尾の狐のお話しか聞けなくて楽しかったです。座員の皆さんが多才多能なを改めて感じました。初めて記事を書いて失敗してお手数をおかけしてしまいました。皆さんがサポートタイプに対応してくださりました。ありがとうございます!(M)

相模人形芝居 下中座だより

令和5年 七夕号(通算第3号)
令和5年7月1日発行

発行・編集人: 林 美穂子(下中座 座長)
連絡先: 0465-44-4573
ホームページ <http://www.shimonaka-za.jp>
メールアドレス newsletter@shimonaka-za.jp
デザイン: 上條 祐嗣